

中国簡牘研究の新しい動向

李 学 勤
訳・菅 谷 文 則

『木簡研究』は創刊以後、一貫して中国の簡牘研究の状況の紹介を重視されてきた。創刊号には大庭脩氏の「中国簡牘研究の現状」を、第三号には池田温氏の「中国における簡牘研究の位相」があり、ともに中国簡牘の発見と、研究について、全体的に論述されている。⁽¹⁾第七号の大庭脩氏の「中国における最近の漢簡研究」は、さらに一九八一年以後の状況を全面にわたって紹介しており、読者に対して大いなる便宜を与えられた。中国の簡牘研究者として『木簡研究』と、上述したいく人かの学者のご努力に対して、感謝の意を表さねばならないと思っている。

そこで、私は、中国簡牘研究の近年の動態について、いく点かの私の見方を述べ、大庭脩先生が本誌第七号に発表された大作の補完をなしたいと思う。中国においては、出土品の整理にあっても、研究においても、いつも、帛書と簡牘は並せて論べられており、本文でも帛書をそのうちに併せることを、言っておきたい。

(一) 簡牘発見地域の拡大

一九四九年以前に発見された中国古代簡牘は、基本的にはすべて西北地区において出土していた。中華人民共和国建国後、考古学研究的発展に伴って、簡牘発見地点は急速に増加し、簡牘分布の認識について、大きい変化をもたらせしめた。

五〇年代には、まず湖南省長沙の数地点において楚簡を検出した。この連続した発見には、三つの意義があった。第一は、西北地区ではなく内地において簡が発見されたこと。第二は、簡が戦国時代のものであったので、簡の実物の年代が先秦に至るまで早くなったこと。第三は、簡がすべて竹製で、竹簡の始まりについて、多くの知見を得ることができたこと。

長沙以外で一九六六年以前に内地で出土した簡のうち、最も注目をひいたものは、河南省信陽市長台関の楚国の竹簡であった。⁽²⁾実は、この時期にはその他の地域においても簡牘は出土していた。それら

は湖北省武昌市任家湾⁽⁴⁾、河南省睢县劉家渠⁽⁵⁾、江蘇省連雲港市網壩と塩城三羊墩⁽⁶⁾などであったが、出土した簡がすべて断簡であったので大きな注目はひかなかった。

湖北省江陵望山出土の楚簡は、そのニュースが出版中断直前の『文物』に発表された⁽⁷⁾が、それ以後、どのような整理、研究もされなかった。

七〇年代から、簡牘の大量発見の新時代に突入した。

華中と湖南省長沙市などの地域で、続々と発見され、なかでも湖南省長沙馬王堆漢墓出土の竹・木簡と帛書は、極めて重要であった。これと同時に、湖北の重要性がかく明らかになってきて、湖北省江陵・雲夢・隋州などで、重要な発見があった。そのうち隋州では今日まででもっとも古い竹簡が発見され、雲夢では従前にはみられなかった秦簡が発見された。江陵の楚簡・漢簡は今まで全く見られなかったもので、いまでも継続して出土している。

江蘇省も常に簡牘が出土する地域となっており、その地点は連雲港と塩城以外にも、さらに盱眙・邗江・儀徵などである。そのうち儀徵胥浦の前漢簡牘は、その内容がもっとも珍異なものとする事ができる。江蘇と両湖〔湖北と湖南の両省を併せて両湖という〕の間の安徽省阜陽市、江西省南昌市等においても、前後して発見された。

両湖から江蘇にかけて、そしてやや北方であるが山東省臨沂、さらに南の広西省貴県などの地域を加えると、非常に大きい範囲とな

る。この範囲は、戦国時代にあつては、楚文化の影響が及んでいたところであるので、かつても古代の簡牘と楚文化が特殊の関係にあると考えられたこともあった。私も拙論のなかでこのような現象を指摘したことがあった⁽⁸⁾。しかしながら、内地の簡牘及び帛書が上述の範囲から集中して出土するということは、おもに、この地域の地下条件が竹木と織物の保存に適しているにすぎないのではないかとみている。

歴史上の簡の二回の大量発見は、ともに上述の楚文化の範囲の外であった。第一回は前漢時代の孔壁から出土した経で、その地点は山東省曲阜である。第二回は西晋時代の汲冢の竹書紀年で、今の河南省汲県にあたる。この両地点は、ともに中原地区である。近年、河北省定県八角廊と北京市大葆台において前後して漢簡を発見したが、前者は豊富で、このことは北方においてもまた簡牘が出土することを証明した。このほか、西南の四川省青川県においても、秦の木簡を発見した⁽⁹⁾。こうしてみると、中国各地域において、すべて簡牘が出土する可能性があり、我々の視野も以前に比べて大幅に拡げられた。

(二) 整理作業の現状

中国古代の簡牘と帛書は、全国の多くの地区で発見され、その発掘調査の大部分は、各地の考古工作者によって進められている。し

かし、簡牘と帛書の保護と整理は、比較的经验豊かな専門家による必要があるので、一九七〇年代以来、発見された各々の資料の多くは、北京と各地の学者が一緒に整理し、力を出しあい協力してきた。たとえば、一九七二年の山東省臨沂銀雀山、甘肅省武威旱灘坡の兩漢代簡牘は、まさにこの様な協力の先例となった。長沙馬王堆帛書、雲夢睡虎地秦簡、一九七三年から七四年に新たに発見された居延漢簡などは、すべて国家文物局（現在は文化部文物局となり、そこに古文獻研究室が特設されている）の組織下、各分野の学者によっておののの整理小組「チーム」が組織され、整理と注釈作業を分担した。

出土した簡牘あるいは帛書は、まず、発掘担当者と文物保護関係の専門家が、整理および、必要な技術的処置をおこない、その後写真撮影をおこなう。簡牘や帛書本体はそのどれもが、脆弱で、損傷しやすいので、整理作業の大部分は写真によって進められている。簡の編成復元、帛書の断片の復元は、基本的には、切り抜いた写真の貼り合せによっている。写真の文字が明瞭でないか、あるいは簡や帛の割れ口や裂け目を、あるいは色調を調べねばならないときのみ、現物に近づき照合する。しかしながら、全ての釈文は、やはり現物と対照するので、現物の利用は多い。

復元は整理の要諦である。一本の極めて細い簡を十いくつもの断片から新しく復元したこともある。帛書は絹織物であるので、その断片は時には変形しているの、復元はさらに難しく、断片の上下

左右を考えながら、相互接合してゆかねばならない。馬王堆帛書の断片は、時にはその上面に一点の筆画があったり、時には米粒のように小さい。しばしば一日を要しても一断片も復元できないこともあった。一小片の復元が、その作業をした人々に大いなる喜びを引きおこしたものである。

簡と帛については出来る限り復元したのち、すぐ釈文を書き、必要な注釈を加える。注釈は読者が簡と帛の内容を知り、かつ、種々関係する問題を解決することを助けるものである。たとえば簡と帛そのものの特殊なあり方などはすべて注釈において説明する。注釈は簡明扼要（簡かつ明で要点をおさえていること）を原則とし、研究の基礎を固めることを望むもので、決して研究活動に代るものではない。

整理報告書はすべて簡帛の原寸大写真、さらに時には摹本とともに釈文、注釈が付けられている。報告は一般に北京の文物出版社から出版される。普及を目的として、時には、釈文と注釈を主にした平装の普及本（ペーパーバック）が出版されることもある。報告の印刷製本は早くはなく、ある種の釈文は先きに雑誌『文物』に発表され、その発表の順序は月刊の『文物』→普及本→報告書となる。この過程にあつて、整理小組は一部を訂正することもあり、このため報告書は最終の定稿となる。

報告書は綫装本としてきたが、製本が比較的高いので、現在では

全部を精裝本（「ハードカバー」として）いる。精裝本はすでに『馬王堆漢墓帛書』の（老）・（参）・（肆）、『銀雀山漢墓竹簡』（老）があり、『睡虎地秦墓竹簡』の精裝本は日ならずして出版される。

馬王堆帛書、阜陽雙古堆漢簡、新発見の居延漢簡の整理はともにまもなく終了の声を聞く段階となる。いま精力を集中して進めているのは、新しく発見された江陵張家山漢簡で、その内容のうちもっとも重要なものは、漢代の律令である。私共は、一日も早く整理作業を完成させ、その資料を公開し、国内外の学者の研究に供したいと思っている。

上述した以外に、若干の簡牘は各地域の学者によって整理が進められており、その数も少なくはない。たとえば一九七一年に発見された甘肅省甘谷漢簡¹³がその例であるが、やはりそのようにしているこれらについては、いちいち紹介しない。

文物出版社は最近『秦漢魏晉出土文獻』をはじめ、一九八四年には、林梅村・李均明『疏勒河流域出土漢簡』、一九八五年には呉九龍『銀雀山漢簡積文』を出版した。すべて簡の順序または出土時の番号によって積文を配列している。読者にとっては検索研究するのに特に便利である。

（三） 学術界への影響

中国新発見の簡牘、帛書の内容は非常に多量かつ広範で、地下の図書館を開放したと形容したことがあるが、たぶん、誇張にすぎるとはいえない。このような新発見は連続して公開され、学術界を大いに刺激した。中国の近年のこの方面の研究はたぶん、下述のいくつかの傾向にあると言えよう。

第一 政治史・法律史の面

睡虎地秦簡の発見の影響は極めて深い。簡の主要な内容は秦律と律説（発表時には「法律答問」と題していた）である。誰れもが知っているように、中国古代の法律で、今迄完全に伝わっているのは、唐律をもって最古としていた。より古い法律は、今迄はわずかに輯録された零散なもののみであった。秦律竹簡の出現は、当然のことながら、学術界に極めて大きい震動を引き起こした。

秦律の研究はすでに、多くの論文が発表され、秦律について、各方面から研究が加えられた。最近、『法学叢書』として『秦律通論』が出版された¹⁴。その本は九章、五一五ページにも及び、秦律について各方面から総合的に論述されている。この本は法律面に重点をおいており、秦簡に反映している全ての秦の国家制度については、今に至る迄一冊も総合的研究の専著は出ていない。

一九八三年末から八四年初にかけて、湖北省江陵張家山で発見された漢簡にも五〇〇支もの漢律があり、年代はおよそ呂後の時期で

ある。この漢律の内容は、睡虎地簡秦律と同様に豊かで、秦・漢兩時代の法律の対比研究の条件が備わった。一たび江陵簡が発表されると、「秦・漢律比較研究」を著わす機運が成熟され、兩代の国家制度の探究もまた大きく促進された。

第二 社会経済史の面

秦簡中には多くの臣妾と隸臣妾の資料があり、学者の注目を多く集めた。その主要な原因は、中国の学术界では、古史の分期についての討論がすでに半世紀以上も続いており、奴隸制はその中心課題の一つであった。秦簡中の臣妾は明らかに奴隸身分であるが、隸臣妾は刑徒であるのか奴隸であるのかについては、その見方が一定していなかった。今日までに、隸臣妾に言及した論文はすでに約二十篇も出されている。江陵簡の漢律には大変多くの隸臣妾の記載があり、この面での討論が發展してゆくものと確信している。

臨沂銀雀山簡の一部分を、発表の時には「守法」「守礼」十三篇と題した。その中に「田法」一篇があり、戦国時代の土地制度を述べたもので、すでにいく人かの学者が論文を発表している。別の一篇「市法」もまた重視されている。

第三 科学技术史の面

馬王堆帛書中の古代科学技术史の材料、たとえば「五星占」「天

文雲氣占」「導引図」等は、公開されるとすぐに広く注目された。帛書中の医書などの方技「方士の行う神仙や医術のこと」の著図は、中医学界「現代の漢方医のこと」で多く研究がなされ、長沙馬王堆医書研究会は『馬王堆医書研究專刊』さえ出版した。

『馬王堆漢墓帛書』（肆）は、最近出版された。この報告書には馬王堆出土の全ての医書が含まれ、四種類の竹・木簡もまた収録されている。その中の帛書「雜療方」「養生方」などは、はじめて発表されたものである。たぶん医学界はこれらの新資料について深く研究されるものと思っている。

第四 學術史の面

新発見の簡牘と帛書の大部分は、書籍で、先秦から漢代に至る多くの佚書を含み、また現存する伝本と異なる書籍もある。「これらの資料は、われわれが、伝世した古書籍によって解決することが出来なかったり、甚だしくは、全く見出しえなかった問題を解決するのに役立ち、われわれは前人が古書籍を校訂してきた成果を検討することができ、多岐にわたる論争の問題の是非を決定することができ。」とある学者は指摘している。これらの材料を利用しての古典籍の校勘作業は、いま始まりつつある。

簡帛書籍の発見は、古典籍がどのようにして形成されていたかをより深く認識させてくれる。大部分の古典籍は、すべて伝流と、修

訂の過程をもっている。過去に偽書の汚名をきせられた古典籍、たとえば『六韜』『文子』『尉繚子』等は、簡・帛中に見出されたので、新しく人々の承認するところとなった。これは、清末以来の古典籍の弁偽的研究について、新しい評価をさせることになり、中国古代学術史の研究にきつと、大きい影響を与えることになるう。

以上は、簡単な私見であつて、遺漏を免がれえず、皆様のご教示をお受けしたい。

(完)

〔訳者付記〕

○この日本文は、同時掲載の中国文の全訳であるが、注については同一であるので、日本文では省略している。注の番号は共通している。

○原文は全部、正漢字で書かれているが、日本文は一部の用語を除いて全て、現行の日本漢字に改めた。

○日本文中の「」は訳者の説明である。地名の初出に省名を付けた。

○原本の段落は、出来る限りそれに沿って日本文を作成したが、受け身形式や、日文と中文の文体構成の違いによって、その一部の句点を読点としたところがある。中国語の主語、なかでも概括的に我々という場合の「我們」は訳出していない。数詞についても同様である。